

開催日:令和4年6月2日(木)

場所:生野区役所6階 大会議室

ご提言(要約)	区の考え方、対応(要約)
ものづくり、中小企業のまち、銭湯の文化と生野区が先陣を切って広がってきたが、いまは廃れてきた。ものづくり工場などで面白いところをPRして、伝統が途絶えないように上手くアプローチして歴史をつないでいくことが必要。 民間のアクションが増えるといい。区は大きな視点で取り組んでいるので、まちに住んでいる人たちがまちを一番理解しているし、まちの魅力を引き出せて、まちが変わると思う。	ものづくり、中小企業のまちであることについては、「ものづくり百景」のPRを、オンデマンドバスのキャッチボールイベントなどイベントの折に実施しております。今後も、折を見つけてPRに努めるとともに、デジタルブック版の活用や様々な団体との連携を通じて広報機会の拡大に努めるなど、これまで以上に周知方法の拡充に努めてまいります。
事業所は跡継ぎがなく、古くからやっているのでカッコよさがはないが、残すべきところは残して、アップデートすべきところはアップデートして伝統を紡ぐというところを最優先に置いたとき、県外の人たちに面白いまちだよというPRをしていくべきだと思う。	「ものづくり百景」デジタルブック版を活用するなど、ものづくりのまち生野の魅力を広く周知・啓発に努めてまいります。
生野区には非営利活動団体がたくさんある。そうした団体と工業をつないでもらって、コラボで何かをするために、区には間を取り持って欲しい。ものづくりのさらにもう一つ上に進む何か面白いものができると思う。	当区では、持続可能なまちづくり活動支援事業として、課題解決のため企業・NPO・市民団体などが取り組まれるまちづくり活動を支援してまいりましたが、今後はそういった活動主体の広報を通じて連携を促し、相談があった際には適切に連携が進むように努めてまいります。
多世代教育や多世代交流、共に学ぶ教育といったコンセプトでアンテナ的な場所を作って、生野区だけでなく、いろんな地域から人が集まって、その人たちと生野区を俯瞰で見て、面白い部分にアプローチできたらいいと思う。	区内で活動するさまざまな団体活動と連携協力しながら、「生野の魅力」を伝え、人が集まり、にぎわいを創出するような取組を今後も続けて実施してまいります。
不動産の所有者が三世代くらい経っていて、生野に住んでいないことや貸すのにお金がかかるから難しいなど、自分の中にハードルがあって、使いたい人になかなかバトンが渡せないという状況にある。	不動産所有者の方々への空き家・空きスペースの活用について、当区の取り組みを広報し、適宜相談にのるなど利活用の促進に努めてまいります。
空き家や空き店舗は、貸す側は4~5万円で貸すが、借りる側は3万円なら借りる。でもそこまで安いと貸さないってなる。だから空き店舗がたくさんある。 空き家問題は、政府の税制の問題である。更地にしたら税金が高くなって、空き家のままなら税金がかからないのがおかしい。だから空き家のままになる。	公民連携により、これまでも空き家の利活用についての取り組みを進めてきましたが、貸す側つまり所有者の方々との借り手を繋ぐ方策について今後も検討を進め、施策を進めてまいります。

ご提言（要約）	区の考え方、対応（要約）
土地の価値よりも解体費用の方が高いからほったらかしなる。政府や大阪市が買い取るなどすればいい。	空家については本来所有者等が適切な維持・管理をする責任を負っているものでありますため、公費による買い取りをすることは、適正に解体するなど管理されている所有者との不公平感の観点からも現状難しいものと考えております。 また、空家の解体補助制度がございますので、区役所にご相談いただければと考えております。
近所のお年寄りは、オンデマンドバスの使い方もわからない。何なのかもわからないという人もいます。そうした声をどういう風に反映してどう評価しているのか。 ちゃんと基準を設けて、こういうことがあって、使い勝手が良くてみんなにどれだけ浸透しているかというところまで評価しないといけない。	オンデマンドバスの活用方法については、地域のスマホ教室などを通じて啓発に努めておりますが、その中でいただいた声や使用頻度などを踏まえてオンデマンドバスの社会実験の実施主体である大阪メトロと連携して、理解度促進に努めてまいります。
オンデマンドバスのことを、各種団体の人は知っているが、周りの一般の方にまで、広まっていない。 オンデマンドバスを上本町まで延ばすと利用すると思う。 生野区の南北や東西での交流がないと浸透しないと思う。生野区のことを勉強しようみたいな区民レクリーションやまち歩きなどの企画があれば東西南北で交流が広がって、オンデマンドバスの利用も広がると思う。	区域外への運行エリアの拡大については、大阪メトロに要望いたします。また、ご指摘いただいたオンデマンドバスの利用を前提とした企画についても、大阪メトロと連携し、検討してまいります。
オンデマンドバスは、スマホを使いこなす若者の利用は増えるだろう。ただ、停留所を増やす必要がある。また、朝夕の通勤通学の時間帯に2・3台しかオンデマンドバスは走っていないので、使いにくい時間帯があり、それでは使えない。	区の方に寄せられた乗降場所の追加の提案は、大阪メトロに要望いたします。また、予約が取りにくい時間帯の改善につきましても大阪メトロに要望してまいります。
オンデマンドバスは、クールで賢いけれども面白味がない。バスを動物の形にするとか停留所の色をもっとわかりやすい色にするとか、ストーリーのようなものが必要で、それなしにテクノロジーを持ち込んでも上手くいかない。	いただいたご提案を大阪メトロにお伝えいたします。
疎開道路や御幸森商店街などは新しいお店ができるが、経営だけで住んでいないので、地元の人たちとの接点が作りにくく、町会費を払わないといった問題も聞く。また、地元のいろんなイベントや夏祭りにも関わってこない。他にも、疎開道路にあるニューカマーのお店のごみ問題もある。人が来てにぎわっていて、未来につながっているように見えるが、地元にはいろいろと解決しないといけない問題がある。そのあたりを何とかできたら、もう少し垣根が崩れるかなと思う。	町会の加入については、地域特性を踏まえた対策が必要であると考えており、地域の取り組みなどへの周知方法、参加促進を踏まえたうえで地域とのつながりの重要性を啓発してまいります。

ご提言（要約）	区の考え方、対応（要約）
近所の商店街は、シャッターのしまった店舗が多かったが、この1年でアジア食材の店や料理店などが増えた。近所のスーパーでも外国籍の方が急増した感じがして、地域でも驚いている。 経営課題3でも外国人住民の急増とあるが、区役所が、うまく既存住民との橋渡しをすることで、まちの盛り上がりにつながるのではないかと感じている。 地域としても、仲良くしたら、もっと交流の機会が増えてとても楽しいだろうと思っているが、やり方がわからない。	生野区には60か国に近い外国籍住民が暮らしており、お互いの文化や生活を理解、尊重することで、誰もが安心を身近に感じて暮らせるものと考えております。 引き続き、多文化の共生できるよう交流の機会や情報の発信を行い、誰もが居場所と持ち場のあるまち、安全安心の担保されたまちを目指して取り組んでまいります。
外国人が多くても、コミュニケーションが取れなかったら、そこに住みたくないという人もでてくる。それでは、生野区は西区や天王寺区のように住みたい住み続けたいまちにはならない。どういう未来像を描いているのかと思っている。	
生野区は障がいのある方がとてもたくさん住んでいる。インクルーシブ教育に生野区の学校は頑張っていて、障がいのある子を持つ親にとってとても魅力的である。障がいのある子が地元の学校に通って過ごしているのは、すごい魅力で、アピールポイントだと思う。運営方針にインクルーシブなまちについても盛り込んでほしい。	生野区では、生野のまちが子育て世代に選ばれ、若者が活躍でき、そして区民が誇りに思えるまちをめざしております。 そのため、生野区の実践を進めていくにあたり、生野のまちが多様性を受け入れ包み込む、懐の深い魅力あるまちであるという認識に立つとともに、それら区の魅力・特色を区の内外に向けて効果的に情報発信し、区に訪れ、住んでもらえるようなシティプロモーションを引き続き行ってまいります。

令和4年度生野区区政会議（第2回まちの未来部会）
 いただいた主なご意見等（要約）と区の考え方、対応
 開催日：令和4年11月1日（火）
 場所：生野区役所6階 604・605会議室

ご意見等（要約）	区の考え方、対応（要約）
いくの多文化クロッシングフェス2022は、すごくよかった。ザ・生野って濃さがあり、これまでとは違う新しい生野を凝縮した感じがした。今後、生野区の魅力になるだろうとすごく感じた。ロコミでよさが広まり、イメージチェンジとなる、明るい未来を感じた。ああいうエネルギーのある人たちが、まちづくりのキーマンにもなると思った。	令和4年10月30日、御幸森小学校跡地におきまして、様々な国の料理を楽しめる世界の屋台、地元中学生や大学生と地元企業のワークショップ、多国籍なパフォーマンスを楽しめるステージプログラムなど、国籍や年齢を問わず、多様な文化的背景をもつ人々が自由に集い、交流し合える誰もが楽しむことができるお祭り「いくの多文化クロッシングフェス2022」が開催されました。 これは、御幸森小学校の跡地活用事業者により、御幸森小学校跡地で多文化共生のまちづくり拠点の構築を通じて、誰もが暮らしやすい全国No.1のグローバルタウンを目指す「いくのコーライブズパーク（略称いくのパーク）」のプレオープンイベントとして実施されたものです。 当日は、たくさんの来場者が集まり大変な賑わいを見せていました。 今後とも、このようなイベントをはじめ、生野区の様々な施策・取組を、生野区の内外にしっかり伝えとともに、まちづくりの担い手とも協働し、生野区のまちの魅力向上に向けて取り組んでまいります。
教育も大事だが、町にいろんな面白いものがあると、すごく魅力あるものになると思う。 生野区も、空き家を綺麗にして、起業できる人を募集し、そこで起業のために補助すれば、いろんな人が入ってきて、まちの活性化にも繋がると思う。	空き家の利活用については、空き家利活用改修補助制度の周知にも努めるとともに、オーナーと空き家の活用希望者とのマッチングについては民間事業者と連携し、所有者へアプローチを行い、具体的なニーズに対応しながら空き家の活用を促すなど、様々な手法をもって利活用の促進を進めてまいります。
まちの姿というのががあるが、当事者となる人やエンジンになる人は誰か。誰かが、やらないといけない。 この資料の好循環にまわしていくための2分野3分野は重要だが、担い手がどこにいるのか。生野区に全く来てくれないかもしれないという事との戦いに多分なってくる。魅力をどう作っていくのかや、それを担えるプロフェッショナルが必要。その人たちをどう見い出すのか、どう組めるのかを考えないといけない。 本当にやるための枠組みっていうものがある。それは、このことを本当にやらなければいけない人もやりたくて仕方がない人、それを実現できるような力がある人。それをどう集めるのか。その人たちが、本気になってそのことに対して動き出すっていうことが、このビジョンに備わっているとこのビジョンってすぐ実現するんだらうなという気がする。 多文化共生の話では、委員の中に韓国籍の方はいるが、ベトナム籍の人はいない。一番早いのは、そういう人がいるってこと。本当に多文化共生を形にするためのチームづくりには、そういう人たちが必要。具現化するには、本当にやるための枠組みや仕組みが必要。 やらなければいけない人、やりたい人、実現できる力のある人をどう集めるのか。 その人たちが本気になって動き出すっていうことがこのビジョンに備わっていると、ビジョンはすぐ実現するという気がする。	将来ビジョンで掲げるまちの姿の実現に向けては、行政だけでなく地域住民の方々をはじめ、企業や専門家の方々などさまざまな力が必要となってきます。 リノベーションをするには建築家やデザイナー、専門家が必要になり、ワンストップで相談できる専門家チームを作る必要があります。生野区には、いろいろなリノベーションが実際にできており、力のある専門家、建築家・デザイナーがすでに存在しています。 こういう方々をネットワークで繋げるとともに、様々な専門家や地域の皆さんのお力もお借りしながら、空き家の掘り起こしに取り組んでまいります。 また、空き家でお店をしたい人やものづくりの町工場の方などが「創業」の主体となる方々です。町工場の高い技術力とベンチャーや大学研究者のアイデアをコラボして一緒に新製品を作る拠点づくりを検討してまいります。 なお、区政会議の委員の方々から今後も活発な意見交換をしていただくことで、その熱量がまちを動かすエネルギーになりえるものと考えています。

ご意見等(要約)	区の考え方、対応(要約)
グローバルでは、海外の人たちとの交流を深める中で、世界に対抗できる新しい企業が生野から生まれるっていうス Tepp アップのような感じを絵をかいてアプローチしていくことが重要と思った。	グローバルなまちでありものづくりのまちでもある生野にふさわしいような、町工場の高い技術力とベンチャーや大学研究者のアイデアをコラボして一緒に新製品を作る拠点づくりを検討してまいります。
民間企業や事業者が必要とあるが、これは誰なのか。いま生野区にいる人なのか、招き切れるのか？プロフェッショナルと言われる人を入れないと、このビジョンは絵に描いた餅になる。	意欲ある事業者と社会実験でまちの未来を「見える化」していけるようなまちの活性化プロジェクトを進めてまいります。
まちの不動産価値は、人が上げる。地主たちの教育の場を作るのも面白い。誰かが音頭をとって、地主が自分の空き家を布石として人の流動が作れば、その周辺に人が集まるような環境ができ、まちの資産も上がり、不動産価値も上がると思う。	リノベーションをするには建築家やデザイナー、専門家が必要になり、ワンストップで相談できる専門家チームを作る必要があります。生野区には、いろいろなリノベーションが実際にできており、力のある専門家、建築家・デザイナーがすでに存在しています。こういう方々をネットワークで繋げるとともに、様々な専門家や地域の皆さんのお力もお借りしながら、空き家の掘り起こしに取り組んでまいります。
人の流動があるところで、行政がどう広告をするか。行政が何か補助するよりもまちに来てもらうために、生野区の魅力を書いたビラや区の施策を書いたビラを撒くのも面白い。 生野区はどういうブランディングで行くのか、ダイバーシティをつくれるのこのまちくらいしかないんじゃないかと、多世代・多文化交流が魅力なので、どう見える化して、アプローチするのが大切。	生野区のまちの特色を活かした魅力向上は区役所としても重要な視点・アプローチと考えています。また、そのためには、行政だけでなく地域住民の方々をはじめ、企業や専門家の方々などさまざまな力が必要となります。公民地域それぞれの持つ強みを活かして大きな力となることで、生野区のまちを効果的にプロモーションし、まちのブランディングへとつながっていきます。2025年の大阪関西万博の開催を契機に、地域経済の活性化を区政の柱のひとつとして、まちの魅力とにぎわいの創出に取り組んでまいります。
大阪市も地方と同じような感じになっている。先を見据えて、関わってくれる人たちを増やして、そこから口コミで「このまちが面白い」って広まるといい。やっぱり口コミって強いと思う。 3フェーズ先ぐらいの戦略を練ってする必要があると思うが、そういう形で、生野のまちが、魅力ある面白いまちだと思うんで、どう呼んでいくかを考えていくのが面白いので、みんなで考えられたらと思う。	
引っ越した人に「何で引っ越してきたか」を聞いたら、「利便性の割には安かった」と聞く。生野区に住みたい。住み続けた人、生野区で子育てしてくれる人を増やす必要がある。明るいイメージが出てきたら、生野区が良くなる。	
大人たちが面白く、ワクワクしてないと、こどもたちが集まってこない。面白い魅力的なまちでは、大人たちが何かやったり、チャレンジしている。それを真似する大人がもっと増えていけばいいと思う。教育の基本形は、まねることから始まる。 教育には、教える教育もあれば、協力し合いながら育むって協育や、共に育む共育もあると思う。この三つの教育っていったところを具体化する。協育は、出産を経験した先輩と連携できるような場所で、協力しながら、共に育むまちを作り、そこにこどもたちを巻き込み、大人たちはこうやって作り上げていくんだって背中では学ぶ教育や、教える方の教育も重要になってくる。	こどもたちが楽しくチャレンジする大人たちを真似するという姿はこれまでもこれからも時代を創っていく大きなモデルであると考えられます。 この度の将来ビジョンの素案においても、公民地域連携のステージの中で、第4分野としてまちづくりの担い手が次世代へ継承され拡充し、持続・発展していくまちづくりについて言及し、そのステージの標語として委員からいただいたご意見にある「共に育むまちづくり」として「共育」の2文字を使わせていただいております。

令和5年度生野区区政会議（第1回まちの未来部会）
主なご意見等（要約）と区のお考え方、対応

開催日：令和5年6月16日（金）

開催場所：生野区役所 5階 502・503会議室

ご意見等（要約）	区のお考え方、対応（要約）
まちづくりには、「やりたいこと」と「やらなければならないこと」がある。まちの魅力とか地域の活性化っていうのは、「やりたいこと」、区民、市民の人たちがこんなことをしたら面白いことを仕掛けてやっていくうちに上がっていくものかと思う。	まちの魅力向上、地域活性化に向けた取組には、面白く、そして楽しみながらの仕掛けづくりといった熱量の高い方々の力がとても効果的と考えられ、そのような方々、個人、団体、企業を問わずすでに生野区のまちで活動されておられる方々も含めて、活躍いただけるような機会を創出できれば、より魅力あるまちづくりにつながるものと認識しております。
もう既に民間で動いているところが、もしかしたら、生野区にあるのかなと。個人単位でやっているところを、区がどういうふうな表現で見せていくのかっていう、ポジショニングになれば面白い。	
カウンターパートという問題で、面白い地域とは、行政が頑張るのではなく、大体、地域の情報発信をしている個人やNPOがあったり、面白いお店、バルをやっているとか、面白い、生きのいい動きっていうのがまちにあって、それをどんどんいろんな発信の仕方をするによって、住みたいなって思わせる、思うようになっていくという、何か熱量があるような気がしている。 やりたいと思ってる人たちが、面白がって取り組んでいる間に、魅力というのは増すものだと思っている。	
もしかしたら、気づいていないだけで、まちをよく見たら、生野を反転させかけてる人っているのかもしれないし、よく知らないだけではないのかと。こんな面白いことをやってる人たちのことをよく知らないで、生野区は魅力がないと言ってるのかもしれないことに注意しないといけないと思う。	
今後は生野区で面白いことをやりたいという人をどう増やしていくか。そして、地域としてはそれをどうバックアップをしていくのか。「まちづくりなんて面白がっていればいいんだよ」ということを言ってあげる大人がいるっていうことが必要かもしれない。面白がって、無責任にやれという、この無責任さが多分、何か未来の責任を持つことになるのかなっていう、こういう時代に入ってきてるんかなと思う。やりたいと思うことを、どう邪魔せずに、協力していくかがということが大事。若者がチャレンジできるまち、それを支援できるまちになると活性化していくと思う。	まちづくりを進めていくにあたり、地域の大人だけでなく、若年層が楽しく、面白く取り組んでいくことも、大きな力になるものと認識しております。そういった若者が積極的にまちづくりにチャレンジできる、そういった土壌が生野区のまちに広がっていくことが、将来の持続可能なまち、発展していくまちにつながっていくものと考えられます。
自分たちの主体性、何をしたいのかというのを住民側が自分たちで湧き出してくるというか、生み出してくるというか、そういうことをいろんな場所でできるような仕掛けということをまずやる必要がある。	まちづくり協議会（地活協）の自主的な取組につきましては、現在、まちづくりセンターによる支援を進めているところですが、今後もまちづくりセンターの持つノウハウを活用いただけるよう地域とまちづくりセンターとの連携を深めるよう取組を進めてまいります。
生野区でよくスタンプラリーを各地域でされている。特に、巽のほうとかは、すごく大きな規模でやられてて、あれが生野区全体に広がれば、もっと面白い。 例えば、生野区内で食べていただける食事券だとかそういった形に変えて、生野区以外の人をもっと生野区の奥のほうに呼び込むような企画が、民間と協力してできたらいい。	いただいたご意見のとおり、地域では、まちの活性化に向けた様々な活動をされております。それらが、区内の各地域にも広がっていくことで、まち全体の活性化につながっていくものと考えられ、ご提案の取組についても、地域の力と民間事業者のノウハウやアイデア、集客力が掛け合わさることで、より大きな流れが生まれる可能性があるものと考えられます。
生野区は外国人が多く住んでいるので、その人たちにもいろいろなイベントを立ち上げてもらって、まちの活性化を促していけばいいのではないか。	ご指摘のとおり、多くの外国人住民の方々が当区に居住いただいておりますので、まずは地域と交流して地域のイベントへ参加いただけるようにまちづくりセンターと連携して促してまいります。

ご意見等（要約）	区の考え方、対応（要約）
まちの活性化は、つまるところ、若い子たちがどれだけ定住したいかなっていうところに尽きると思う。	生野区のまちが持続可能で発展していくまちになるためには、次世代を担う子どもたち、若年層の定住は欠かせないことから、生野区としても、区の特性を活かした様々な施策をとりながら定住促進に努めてまいります。
例えば、生野区が管理してる空き家はこれだけあります。来てくれた人に対して生野区って、何か始めやすいです、空き家のストックがこんだけあって、マッチングさしてもらいます、とアプローチできれば、大きなイベントの単発の一発じゃなくて、継続する意味のある目的を持った、深い目的を持った一発になる。	当区におきましては、不動産市場に出ていない空き家を利活用することでコミュニティを生み出し、まちを盛り上げる活動をしておられる「生野区空き家活用プロジェクト運営委員会」があり、定期的に情報交換を行っておられます。これらの取組の周知を今後、更に進めてまいります。
まちの魅力を高めると言うわりに、まちの魅力として伝え継いでいるだんじり祭りがちゃんとできない状況にある。周辺地域に住んでいる人も、もう少し伝統行事に理解を示してほしい。	だんじり祭りなど地域の習俗的な行事を通じたコミュニティへの理解の醸成は、地域の特性を踏まえて進めていただく必要があります。地域の取り組みを通じて、理解の醸成が深まるよう区役所としても必要に応じた支援をしてまいります。
コリアタウンに多くの人が訪れていることはまちの魅力ではなのか。まちの魅力っていうときに、どうも定住人口を増やすところにフォーカスをしているが、来街者数を増やすこともまちの魅力向上かと思う。	コリアタウンには今や年間200万人もの人々が訪れる一大観光地となっており、生野区のまちにとっても大きな魅力資源となっています。委員ご指摘のとおり、人々の定住だけでなく、リピーターも含めてたくさんの人々が訪れるまちにしていけることもまちの魅力向上の取組と考えられます。
ものづくりの技術が高い生野区であるが、自社商品や区民が買える商品を作っていく、それを広げていくというところまで、ものづくり産業を再生・活性化させていくプランを構築していく必要があるのではないか。	当区のものづくりに携わる企業の多くは「B to B」いわゆる企業間取引が多い業態であり、一般消費者である区民が購入する製品づくりには至っていない現状があります。今年度、取り組みを進めている「生野区ものづくりタウン事業」においては、企業間ネットワークの構築とともに「B to C」に向けた製品づくりも視野に調整を進めております。
空き家の利活用について、空き家活用株式会社と連携しているが、何軒の空き家がどのように変わってどのような取組が増えたのか。空き家を活用することで魅力がどう増したのかなどについて知りたい。	当区のホームページ上では「いくのDEリノベ」という空家等を利活用することにより、まちの魅力が増している事例を32回にわたり紹介しております。また、本市都市整備局の空家利活用改修補助事業のホームページ上では当区の「はたけもり」という事例が紹介されております。空き家活用株式会社との連携協定等による利活用事例は現在（R5年6月）のところありませんが、事例が出来次第上記と同様の広報を進めるよう検討いたします。
いまざとライナーとオンデマンドバスについて、どのコースにニーズがあるのか。これをやることによって誰がどのように喜んで、何かどうよくなっているのか。	いまざとライナーはあべの橋行き・長居方面行きとも通勤通学の手段として利用が定着しており利用回数は年々増加しています。また、オンデマンドバスは生野区役所、鶴橋駅、桃谷駅、寺田町駅などへの利用が多く見られます。これらの取組により、区民の利便性が向上しており、移動に関して身体の負担が少ない環境を創出しています。
住みたい、住み続けたいというまちにするには、よっぽど大きなアクションをおこさないといけないのではないか。	まちを大きく変えるエネルギーは、生野区の場合、個人、団体、企業を問わずまちに暮らす人々、まちに関わる人々に宿っているものと認識しております。この度、生野区では、2025年大阪・関西万博の開催を景気に、そのような人々のエネルギーを最大限に引き出せるように、様々な仕掛けづくりに取り組んでまいります。

ご意見等（要約）	区の考え方、対応（要約）
行政は硬い、関わりづらいイメージがある。もっと民間との距離を縮め、協力し合えたらいいと思う。	まちづくりをはじめ、まちの様々な課題に対しては、従来のような行政主導だけではなく、民間の多様なノウハウやアイデアが必要になっています。そのため、当区としても公民地域連携という手法でもって、様々な取組を進めてまいります。
ネットで「生野」と検索すると、「おもろいまち」みたいなのが上位に来るように、何かブランディングが定着すればすごい。勝手に「生野区、あそこめっちゃ住みやすいで」とか発信するのも面白い。	いただいたご意見のとおり、生野区のまちが、暮らしても、遊んでも、そして働いても面白いまち、となるように区の特性を活かした様々な施策をとりながら、区の内外に効果的にプロモーションを進めてまいります。
教育をアプローチできるまちだったら、もっと何か協力し合いながら育めるような環境をつくれたら住みやすいまちに変わるんじゃないかなと。教える教育もあれば共に協力し合いながら育む共育もあり、これを相まったところが何か住みやすいまちに近づくんじゃないかと思う。	
最近では、名所旧跡に行くのではなく、普通にそのまちで暮らしているような旅がしたいという、暮らし観光という動きがあったりする。何なら、ゆくゆくそこに移住したいっていう人たちのお試し移住として、宿屋をやるみたいなことが全国的に起きてきている。そういう魅力の出し方もある。	生野区のまちには、市内の都心部とはひと味違うレトロで趣のある街並みがあります。いただいたご意見のとおり、そういったところも区のまちの特性、まちの魅力のひとつとして打ち出していくことも、まちのプロモーションとして有効なものと考えられます。